

平成21年度発掘調査遺跡の紹介

六反田南遺跡 IV(下層)

(糸魚川市大字大和川字六反田地内)

海川下流右岸、標高約3.2～5.0mの沖積地に立地します。一般国道8号糸魚川東バイパス建設に先立ち、平成18年度から発掘調査を行っています。今年度は5月中旬から12月末までの約7か月間、2調査区(KB1区・KD1区)、3面(上・中・下層)を対象に、延べ3,488㎡を調査しました。上層では古墳時代前期の玉作関連遺物を多く含む土坑や古代(奈良・平安)の掘立柱建物などを、中層では縄文時代中期後葉～後期にかけての遺物包含層を発掘しました。今回はKD1区下層の縄文時代中期前～中葉頃(今から約4,500年前)の廃棄域(ゴミ捨て場)を紹介します。



廃棄域 遺物出土状況

廃棄域は調査区の北端で見つかりました。南東方向に向けて緩やかに傾斜する斜面部、約80㎡の範囲から大量の縄文土器・石器・礫のほか、食物残滓(食べかす)などが出土しました。土器は富山・石川県に分布の中心を持つ北陸系の上山田・天神山式を主体に、東北系の大木8a式、中部高地系などが出土しました。上山田・天神山式土器は深鉢のほか、台付土器が目立ちます。石器は蛇紋岩製の磨製石斧をはじめ、打製石斧、磨石・敲石、石鏃、石錘、石器の材料である貝殻状剥片、ほかに黒曜石の剥片、ヒスイ原石などが出土しました。食物残滓は非常に微細なため、土壌を洗浄して拾い出しました。魚の歯・椎骨、小動物の肋骨、直径約2mm大の微小な種子などが見られます。

この廃棄域は、平成19・20年度に調査した居住域から北東に約120mの地点に当たります。居住域から出土した土器は北陸系土器が主体ですが、典型的な北陸系土器とは異なり、文様構成など越後の要素が加わることが特徴です。一方、廃棄域出土の土器はほとんどが典型的な北陸系土器であり、両者間では土器様相に若干の違いが認められることが分かってきました。今回の調査は居住域に当たらなかったものの、まとまった量の土器・石器のほか、当時の食生活や自然環境を知ることのできる動植物遺体出土するなど、有益な調査となりました。

(株吉田建設 山本友紀)



上山田・天神山式土器(倒立)



大木8a式土器(同一個体)

しも わり 下割遺跡 IV 下層

(上越市米岡字中割1,086番地ほか)

高田平野中央部に位置する米岡集落^{よねおか}西方の水田下から見つかった遺跡で、標高約14mの沖積地に立地しています。遺跡の東方には飯田川^{いいだがわ}が日本海に向かって流れています。一般国道253号上越三和道路建設に伴って平成14年度から断続的に3回の発掘調査を実施しています。今年度は4回目の調査で、中世から近世初めまでの水田跡と、それより下層の奈良・平安時代の集落の2面を発掘調査しました。今回は奈良・平安時代の調査について報告します。

調査面積は2,537㎡で、掘立柱建物4棟、土坑44基、溝14条などを検出しました。遺構の中心時期は奈良時代（8世紀）ですが、調査区西端で検出した幅の広い溝からは8世紀から9世紀代までの幅広い時期の土器が出土しました。掘立柱建物は4棟とも長軸の向きがほぼ同じで、柱穴は小さく、残っていた柱根も細い、小規模な建物です。建物に近接する土坑・溝からは、煮炊きに用い煤が表面に付着した土師器長甕・小甕、食器に用いた須恵器の杯・杯蓋などが出土しています。これらの土器は日常の暮らしで使用していたものです。墨で文字が記されている土器や、須恵器有台杯の底面や杯蓋の内面を硯に転用したものとあることから、8世紀には、この集落に文字を使用する人がいたことが伺えます。遺構の主体は更に西方に広がっていると予測され、今後の発掘調査の進展によって明らかになると考えられます。

(飯坂 盛泰)



溝の調査風景



掘立柱建物と溝



奈良・平安時代全景(上が北)

ふる と ろ 古渡路遺跡上層 (村上市古渡路字海老屋敷ほか)

三面川左岸の沖積地上に位置しています。日本海沿岸東北自動車道建設に伴う発掘調査を平成20年度から実施してきました。調査区の地形は北から南へ傾斜していますが、中央部はやや高くなっており、標高は14.5mです。そこから南に向かって標高を下げ、三面川の支流である山田川へと至ります。調査によって、中世の集落と縄文時代の狩場であったことが判明しました。今回は中世集落の調査を紹介します。

中世の集落は南北約650mにわたり造営されました。遺構の配置からみて、集落は高速道路予定地外の東西にも広がると推定しています。集落は地形の起伏を活かして、高い所に居住域が設けられていました。

居住域は掘立柱建物・井戸・土坑から構成されています。各居住域は道や溝で区画されています。調査区の南半分では、道や溝がほぼ東西・南北方向を軸として柵目状に築かれています。どの道とどの溝が同時存在だったのか検討中ですが、1辺の区画規模は70～110mの間にあると想定されます。

出土品は非常に少ないですが、陶磁器類（珠洲焼・瀬戸美濃焼・青磁・白磁など）のほか、木製品（鎌柄・箸・人形・漆塗りの椀）、石製品（砥石・硯など）、金属製品（銭貨・刀子など）があります。陶磁器類は一部13世紀代のものがありますが、おおむね14世紀初め～15世紀代のものです。陶磁器類・砥石・硯などは、壊れても漆で補修して使い続けていた様子がうかがわれ、道具を大切に扱っていたことが分かります。

出土遺物の中で特筆されるものとして、表裏に墨で絵が描かれた楕円礫があります。大きさは長径約15cmで、表面に人物画が描かれています。描線は不明瞭ですが、この人物画は棒状のもの（刀）を持った右手を掲げ、左手を腰に当てた姿をしているように見えます。裏面にも意匠不明の描画があります。井戸の底から出土しましたが、用途は不明です。

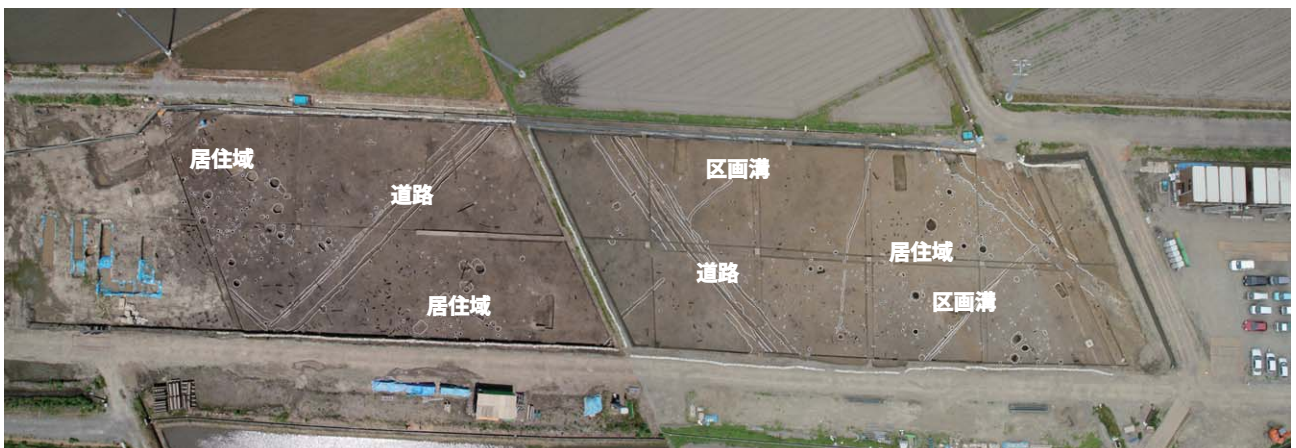
（土橋由理子）



全景（北から）



墨で人物像が描かれた礫（右：模式図）



居住域と道路・溝（向かって右上が北）

むかい おお うら
向大浦遺跡

(阿賀町大字津川字向大浦ほか)

阿賀野川左岸の河岸段丘上に立地し、標高80～81mです。一般国道49号揚川改良事業に伴って、7月から12月にかけて発掘調査を行い、鹿瀬軽石質砂層（福島県にある沼沢火山が約5,000年前に噴火し、その噴出物が洪水などで再堆積したもの）を挟んで、上下2枚の文化層を検出しました。上層からは縄文時代中期前葉と後期及び平安時代の遺構・遺物が、下層からは縄文時代前期以前の遺構が見つかりました。

上層では縄文時代中期前葉のピット2基と、平安時代の竪穴住居2軒、掘立柱建物1棟、土坑6基、焼土遺構1基、ピット34基を検出しました。また、調査区西側では沢2条を検出し、その中から縄文時代中期前葉の土器や石器が多く出土しました。

平安時代の遺構・遺物は調査区北側に集中し、南側ではほとんど見られません。そのため検出した遺構群は集落南側の縁辺部に位置するものと推測され、集落の中心は調査区よりも北側の調査区外の平坦面に存在するものと考えられます。

下層では陥穴12基、土坑2基を検出しました。陥穴は楕円形で、長径100～150cm、短径80～130cm、深さ70～130cmです。底面には小孔があり、落ちこんだ動物を刺すための先端の尖った杭を立てたものと思われます。時期を示す出土品がありませんが、検出層位から縄文時代前期以前に作られたものと推測されます。このことから調査区周辺は、この時期、狩猟の場として利用されていたと考えられます。

(株)ノガミ 金内 元)



縄文時代前期以前の陥穴



縄文時代中期前葉の遺物が多く出土した沢の検出状況



平安時代の竪穴住居



竪穴住居から出土した土師器杯



古墳時代の腕飾り

しゃりんせき 車輪石

古墳の主体部（遺体を安置する場所）には、剣や鏡のほかに、被葬者が身につけていた玉や耳飾りなどの装身具と一緒に収められている例があります。ここでは新潟県では1例しか確認されていない、珍しい資料を紹介します。それは車輪石です。緑色の碧玉（鉄石英）製の腕飾りで、古墳時代前期（今から1,500年以上前）のものと考えられています。

車輪石は腕飾りとして使用されたと推定されています。ただし、身を飾る装身具というだけでなく、被葬者の権威を象徴する「宝器」とも考えられています。

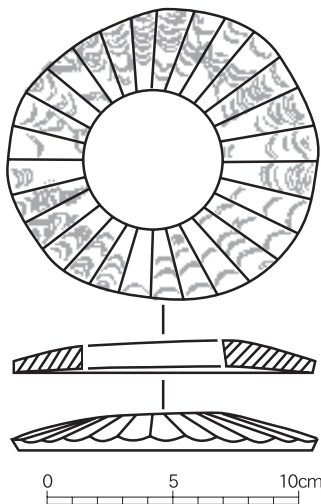
楕円形の扁平な環状品で、表面には凸状の帯を放射状に連ね、あたかも太陽が光を放つようにも見るができます。この形状と文様が車輪に似ていることから「車輪石」という呼称が江戸時代に生まれ、現在もそれを踏襲しています。

その原型は縄文時代にありました。初めは、オオツタノハガイという笠形の貝殻の中央部を内側から叩いて孔を穿ち、全面を磨いたもので、その後、碧玉を素材にして形をまねたものと考えられています。表面の凸帯文様は、オオツタノハガイの放射肋を写したものです。孔径は5～6cmとほぼ一定していますが外径は10～20cmの大小があります。

古くは碧玉製でしたが、時代が新しくなるとほとんどが緑色凝灰岩製に替わりました。石製品だけでなく銅製品（岡山県田邑丸山・奈良県新沢500号墳出土例）と土製品（奈良県橿山古墳）も発見されています。

出土する古墳は近畿中央部を中心に西は熊本県向野田古墳から東は福島県大安場古墳に至る広い地域に分布しています。奈良県島の山古墳（80点）・三重県石山古墳（44点）・奈良県東大寺山古墳（26点）・京都府飯岡車塚古墳（20点）や奈良県橿山古墳（100点以上）のように多量に副葬した古墳もあります。

北陸地方では、福井県河和田遺跡や石川県片山津遺跡などの玉作遺跡から、車輪石の未成品が出土しています。この作りかけがあることと碧玉が産出することから、北陸地方で作られ、畿内の有力者の墓に副葬されたと考えられています。（『日本考古学事典』による）



『佐和田町史』を改変

このように珍しい車輪石が、佐渡市（旧相川町）鹿伏から出土し、昭和天皇に献上されていたことが分かりました。一緒に出土した銅鏃などと一緒に宮内庁に保管されています。

これまで鹿伏周辺で古墳は発見されていません。鹿伏地区の南側には台ヶ鼻古墳という古墳時代中期の横穴式石室の古墳があります。東の国仲平野では、蔵王遺跡など弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡が発見されています。今後台ヶ鼻古墳よりも古い古墳が二見半島周辺で発見される可能性もあります。もし古い古墳が発見されたら、佐渡の古墳時代は大きく変わるでしょう。これらの可能性を示す大変重要な出土品です。



オオツタノハガイ（長さ6cm 屋久島産）
両津郷土博物館蔵

オオツタノハガイとは？

本来のツタノハガイは殻長4cmほどで、神奈川県真鶴から房総半島以南に分布しています。殻は低い笠形で、放射肋が殻縁に突き出して植物のツタの葉に似ています。約5cm以上をオオツタノハガイと呼び、南方では8cm以上の大型になります。

埋文インフォメーション

校外学習

体験学習



滑石を削って、勾玉づくりの開始です

4月から11月までの期間に体験学習や職場体験などで埋蔵文化財センターを訪れた学校は53校、2,889人です。

小学校では、火起し・石器体験の学習が多いのですが、「勾玉づくり」を行った小学校もありました。



コンクリートブロックの角を利用して、勾玉の凹みをつくります



恐る恐る縄文土器に触れました



一生懸命「舞きり」を回し、火を起しました

また、新潟県立新潟盲学校の児童生徒の体験がありました。本物の縄文土器に触ったり、火起こし、石器体験も行いました。

はじめは恐る恐る土器に触っていましたが、土器の肌触りが思っていたよりも柔らかいことを感じたようです。

出前授業

上越市谷浜小学校で土器づくりの出前授業を行いました。土曜日の学校参観に合わせ、保護者と一緒に3時間ほど土器づくりを体験しました。出来上がった土器は「文化祭」で展示して、11月には、センターで焼き上げました。いくつか壊れてしまいましたが、世界に一つしかない自分が作った土器を持ち帰ることができました。



親子で一緒に土器づくり



焼きあがった壺にほっとしました

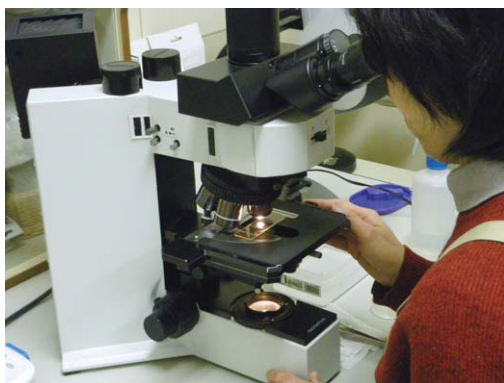
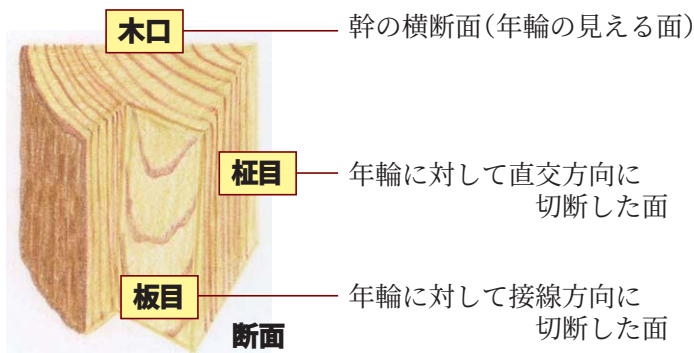
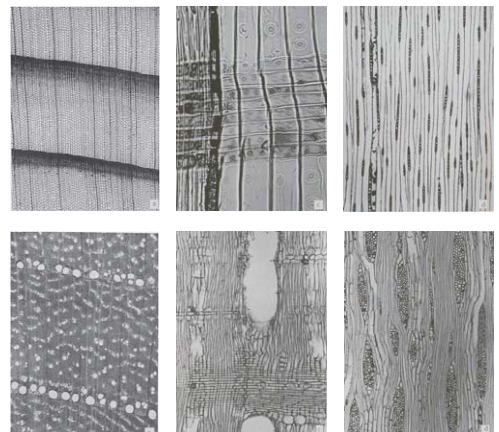
保存処理室から

利用された木の種類を調べる 一樹種同定一

樹種同定とは？

「樹種同定」は、木材から採取した組織を生物顕微鏡で観察し、木の種類を特定する方法です。新潟県内では、昔の人々が何の木からどのような製品を作っていたのか、また時代や時期によって利用する木の種類に相違があるのかなどを調べるため、20年程前から出土木製品の樹種同定を広く行うようになりました。

樹種同定は、次の手順で行います。まず、木製品から木材の3断面（木口・柾目・板目）の組織をカミソリでごく薄く削り取ります。この時、できるだけ木製品の形を損ねないように注意します。次に、削り取った組織をプレパラートにのせ、生物顕微鏡で観察します。そして各々の樹木に特有な組織のパターンから、木の種類を特定していきます。

スギ
(針葉樹)ケヤキ
(広葉樹)

【木口】

【柾目】

【板目】

『図説木材組織』から転載

樹種同定から分かること

木製品の樹種同定を進めていくと、昔の人々が道具の用途に合った性質の木を選択し、利用していたことが分かります。例えば、縄文時代晩期（今から約25,000年前）の青田遺跡（新発田市）の樹種同定結果からは、掘立柱建物の柱には腐りにくくて丈夫なクリが、狩猟に使用した丸木弓には弾力のあるイヌガヤが、また丸木舟や削物（木材を削り抜いたお椀など）には加工することが簡単で巨木になるものが多いトチノキが利用されていたことが分かります。更に、これらの結果を遺跡から出土した自然木の同定結果と比較すると、遺跡の近くに生育していた木を利用したものか、少し離れた山からわざわざ運んできたものなのかが分かります。

また、樹種同定の結果は、保存処理方法の選択や計画作成においても重要な情報を与えてくれます。保存処理室では、以前「埋文にいがたNo.50」で紹介したとおり、出土木製品を乾燥による変形や腐食から守り、強化するため、ラクチトールという人工甘味料を木製品に浸みこませて結晶化させる保存処理を実施しています。広葉樹の中には、水分の通り道である導管に水が通らなくなった後、チロースと呼ばれる組織で管が塞がれるものがあります。クリやクヌギなどがこれに当たり、これらを用いた木製品はラクチトールの浸透速度が遅いことから、ほかの樹種に比べて浸透期間を長くしています。

(三ツ井朋子)

県内の遺跡・遺物68

真野古墳群(昭和47年県指定)

(遺跡所在地：佐渡市背合・大須・大小・大倉谷)

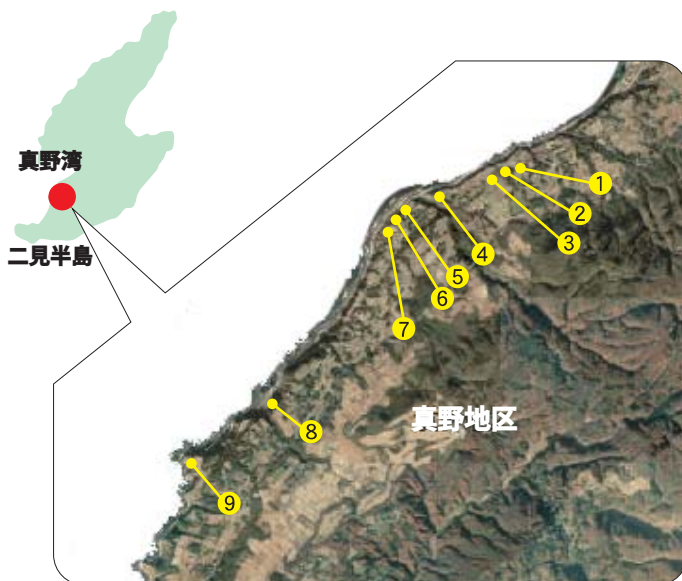
佐渡の古墳は、そのほとんどが島の西側の真野湾と二見半島に集中しています。

真野古墳群は旧真野町の東側に集中する古墳群です。小川内川と真野川の合流点付近から旧羽茂町小泊荒磯地区までの、真野湾の海岸線に沿った約10kmの間に10基以上の円墳が分布しています。「越の長浜」と呼称されている景勝地を眼下に臨む、標高10～60mの海岸段丘上に古墳群は営まれています。

かつては数多くの古墳が存在していましたが、耕作や道路工事等で破壊され、現在墳形をとどめているものは10基で、県史跡に指定されています。墳丘は低く平坦な円墳です。現状は石室が露出して、墳丘のないものもあります。直径15m内外、高さ1.5m前後のものがほとんどです。

石室は、自然石や割石を積み込んだ横穴式石室で、遺体を安置する玄室は袖無型のものと片袖型の2型式があります。石室の長さは5～6m、幅は1.5～1.7mで、玄室への通路となる羨道と玄室に分かれています。副葬品としては土師器、須恵器の土器類のほかに、直刀・鉄鎌・耳飾りである銀環や馬具などが出土しています。製塩土器の破片を玄室に敷き詰めた古墳も確認されています。製塩土器の存在から、塩を作っていた集団に関係する古墳ではないかという意見もあります。

本古墳群の作られた時期は、墳丘の規模や石室の在り方、副葬された土師器の型式から、古墳時代後期の6世紀末ないし7世紀初頭から7世紀後半までと推定されています。古墳時代の最後の群集墳として、佐渡の古墳時代から古代にかけての状況を知る上で重要な遺跡です。



蝦夷塚第1号墳(昭和52年撮影・本間裕亨氏提供)

1	緑塚第1号古墳		ケラマキ第1号古墳	○
	緑塚第2号古墳		ケラマキ第2号古墳	○
2	蝦夷塚第1号古墳	○	ケラマキ第3号古墳	○
	蝦夷塚第2号古墳	○	ケラマキ第4号古墳	
3	飯田清次郎古墳		ケラマキ第5号古墳	○
4	三貫目沢東古墳	○	ケラマキ第6号古墳	
	三貫目沢西古墳	○	7 背ノ沢古墳	
	大須第1号古墳		8 大立蝦夷沢古墳	○
5	大須第2号古墳	○	9 蝦夷の塚第1号古墳	
	大須第3号古墳		9 蝦夷の塚第2号古墳	

○印は県指定 ほかは多くが埋滅

埋文にいがたNo.70

発行 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟市秋葉区金津 93番地1
TEL (0250) 25-3981
FAX (0250) 25-3986
e-mail : niigata@maibun.net
URL : http://www.maibun.net
印刷 阿部印刷株式会社